

横浜市特別支援教育推進指針

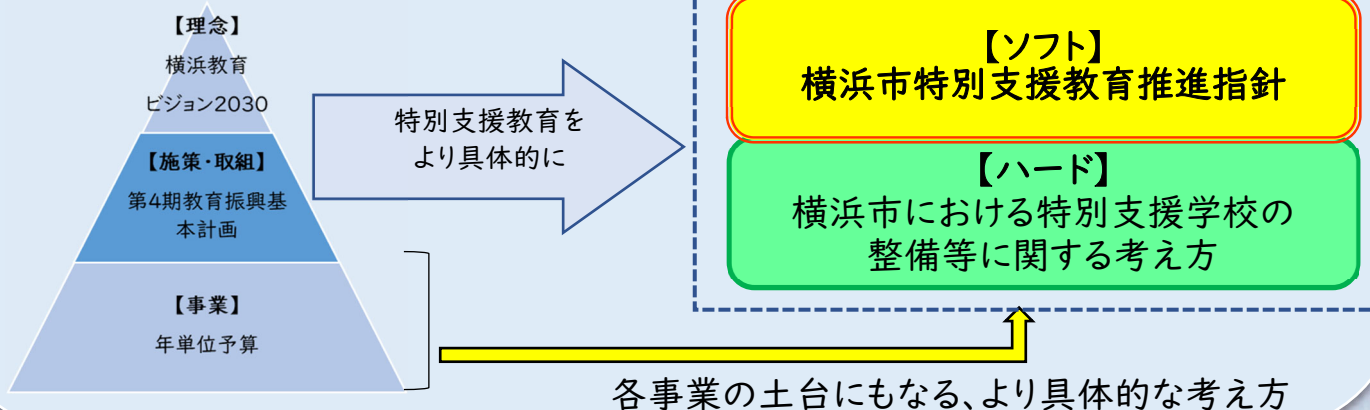
概要版

昨今、特別な配慮や支援を必要とする子どもたちが増加し、その障害も重度化、多様化しています。また、国の動向からも、特別支援教育が、現在、大きな転換期を迎えており、より一層の推進・充実が求められていることが分かります。

そこで、改めて、本市における特別支援教育の現状と課題を整理し、今後概ね 10 年間を見据えた本市の特別支援教育の目指す姿を示し、特別支援教育の推進・充実を図るとともに、全ての教職員に向けた指針としていきます。さらに、保護者や関係機関等、特別支援教育に関わる全ての関係者と共有し、児童生徒一人ひとりの豊かな成長を支える社会に開かれた教育課程の実現を目指します。

位置づけ(イメージ)

2030 年頃の社会を見据えて、横浜の教育が目指すべき姿を描いた「横浜教育ビジョン 2030」(2018(平成 30)年策定)と、そのアクションプランである「横浜市教育振興基本計画」の方向性や施策・取組の状況を踏まえ、改めて、本市の特別支援教育の現状と課題について整理を行い、教員の専門性の向上等、各学びの場における主にソフト面に関する取組の方向性を示しています。



本市においては、これまで国の示すインクルーシブ教育システムの構築を進めてきました。

他方、特別支援学校PTAの皆様や、本指針検討にあたり設置した横浜市特別支援教育懇談会において「全ての児童生徒が地域の学校に通い、同じ場で学ぶ環境の実現に向けた横浜市の考え方を示すことが必要」との強いご要望もいただいております。従来よりさらに踏み込んだインクルーシブ教育の方向性を提示することが求められています。

ここで改めて、全ての子どもたちが、可能な限り地域の学校で共に学び、共生社会の担い手として育つことを目指すという理念に立って、本市の強みを踏まえた横浜らしいインクルーシブ教育の考え方について整理します。

横浜市 の 5 つ の 強 み

強み①

個別支援学級を小・中学校全校に設置

- 本市では、平成 29 年度までに個別支援学級を小・中学校全校に設置。
- 一人ひとりの教育的ニーズを見定め、それに最も的確に応えられるよう、連続性のある多様な学びの場を整備。

強み②

特別支援教室の全校設置と独自の校内支援体制の構築

- 本市が全校に設置している特別支援教室は、本市の独自配置である児童支援専任教諭、生徒指導専任教諭や特別支援教育コーディネーターが校内の中心となって運営。
- 実践推進校として非常勤職員を配置する取組を推進。

強み③

横浜市立特別支援学校の運営実績

- 本市は、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱と各障害種の市立特別支援学校を運営。
- 臨床指導医制度等、医療・福祉等関連分野と連携。

強み④

地域療育センターの整備と連携

- 療育と教育の連携として、小学校・義務教育学校前期課程の教員向けの障害理解促進のために、地域療育センターによる支援の実施。

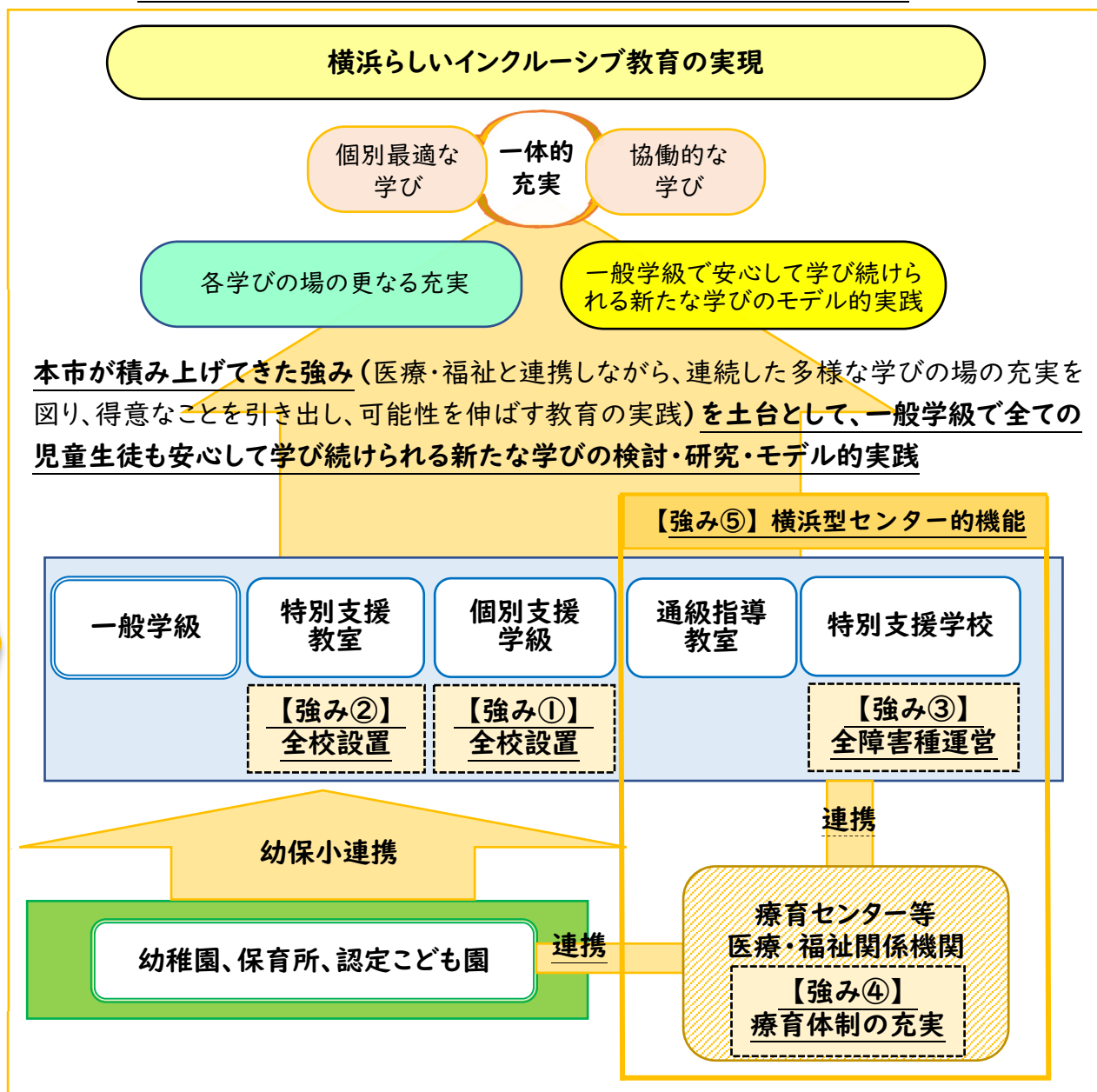
強み⑤

横浜型センター的機能の実施

- 特別支援学校だけではなく、通級指導教室、地域療育センター、学齢後期障害児支援事業が、主に担っている障害種別に基づく専門性を生かし、小学校・中学校・義務教育学校・高等学校のニーズに応じ、地域を意識した展開によって、学校支援を実施（＝横浜型センター的機能）。



【横浜らしいインクルーシブ教育の実現に向けたイメージ】



インクルーシブ教育の実現に向け、横浜らしさを追求していきます

- 多様で柔軟な学びの場を整備してきたことなどは、本市の財産です。
- 一方、インクルーシブ教育の実現に向けては、同じ空間にいただけではなく、すべての児童生徒が誰一人として取り残されることのない環境を目指していくことが必要であり、そのためには、現在の学び方、支援の体制、交流及び共同学習の在り方等の見直しが不可欠です。
- 他方、「専門的支援を求め、本人にあった学びの場を選択することを尊重してほしい」という声もあり、同じ空間で学ぶことの追求だけでなく、学び方や学ぶ場所などを選択できる環境をこれまで以上に整えていく視点も重要です。
- これらの課題に対して、これまで培ってきた多様な学びの場における教育や他機関との連携等による知識・経験を活かし、モデル的な研究を重ねながら、インクルーシブ教育における横浜らしさを追求していきます。



インクルーシブ教育の実現に向けた具体的取組（モデル的取組）

取組①

一般学級での学び方等の研究・検討・モデル的実践

- 令和6年度から、一般学級において配慮や支援が必要な児童生徒が安心して学び続けられる仕組みの検討・研究からスタート。
- 令和9年度以降、個別支援学級の児童生徒、6年後には、地域で暮らすすべての児童生徒が一般学級で安心して学び続けられるようにするための、基礎的環境整備、合理的配慮の提供、支援の在り方を検討、研究し、児童生徒の教育的ニーズに応じた「新たな学び方」のモデル的実践。

取組②

特別支援学校の児童生徒と一般校での交流及び共同学習の在り方

- 小・中学校における一般学級と個別支援学級の交流及び共同学習や、小学校に併設する特別支援学校における交流及び共同学習の効果を振り返り、交流によるインクルーシブ教育への効果を検証。
- 近隣の小・中学校と特別支援学校が交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方について、検討・研究・モデル的実践。
- 特別支援学校、通級指導教室、地域療育センター等の横浜型センター的機能が、一般学級の運営により効果的に機能を発揮できるような仕組みを検討・実践。

取組③

すべての児童生徒が安心して学ぶ環境に向けた検証

- 取組①では、研究の取組状況を踏まえ、障害がより重度の児童生徒への学びに、どのように良い影響を与えられるかについて、学校と外部専門家と連携し、検証を実施。
- 取組②では、学校と地域、外部専門家などで構成される連携協議会（仮称）において、小・中学校と特別支援学校の児童生徒が行った交流及び共同学習の教育効果や共に学ぶための指導体制等について検証を実施。
- 取組①、取組②ともに、特別な配慮や支援を必要とする子どもたちだけの教育的効果だけではなく、一緒に学ぶ子どもたちの教育的効果を検証。
- 特別支援学校、通級指導教室、地域療育センター等の横浜型センター的機能が、一般学級の運営により効果的に機能を発揮できるような仕組みの検討・実践。



一般学級・特別支援教室

一般学級で安心して学べる
環境を目指して

- インクルーシブ教育の実現に向けたモデル事業の検討
- 教育内容・校内支援体制の充実
- 特別支援教室の充実
- 一人ひとりの実態に応じた適切な指導と支援の充実



通級指導教室

障害特性を踏まえた、
専門的支援の充実に向けて
応えていくために

- 通級指導教室の充実
- 協働型巡回指導の充実
- 高校通級の充実



個別支援学級

一人ひとりの教育的ニーズに
的確に応える指導・支援に向
けて

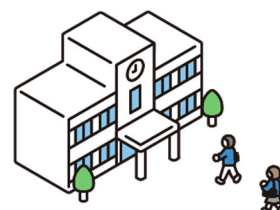
- 個別支援学級の充実
- 交流及び共同学習の充実
- 卒業後の進路の情報共有の充実



特別支援学校

重度化・重複化・多様化する
児童生徒に合わせた
専門的支援の充実に向けて

- 教育内容の充実
- ICTの更なる活用
- 横浜型センター的機能の更なる拡充
- 「協働研究推進ブロック」による研究研修





医療的ケア等、個別の支援を必要とする児童生徒への対応

医療的ケア施策の充実

- ・ 特別支援学校において、児童生徒の保護者の付添解消や通学支援の取組を充実
- ・ 小・中・義務教育学校等において、看護師を派遣し、健康管理や手技指導などを支援

肢体不自由児童生徒への対応

- ・ 必要なバリアフリー等の整備
- ・ 授業や様々な活動に参加できるよう研修及び情報交換会を実施

特別支援教育支援員等の配置

- ・ 特別支援教育支援員やノートテイクボランティアの配置を継続
- ・ 専門的な介助や支援が必要な児童生徒の校外学習等について、支援体制について検討

4

開かれた特別支援教育、関係機関の連携強化

【地域療育センターとの連携】

地域療育センターのもつ知識や経験に基づく適切な評価・療育計画と、個別の教育支援計画・個別の教育指導計画の更なる連携・連動等

【横浜型センター的機能】

横浜型センター的機能の好事例等を小・中学校等へ共有することに加え、これまでの取組の効果を振り返るとともに、今後の支援のあり方等を検討 等

【医療、福祉、関係機関との連携強化】

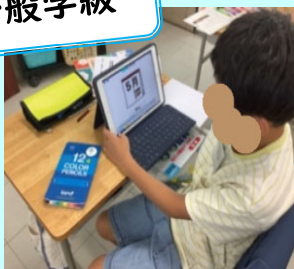
学校だけで悩むことはなく、積極的に取り組めるよう、医療、福祉等の専門的な支援が他機関から受けられるよう、多職種連携を強化 等

【交流及び共同学習の推進】

神奈川県教育委員会等との協力体制を整理。副学籍交流の促進に向けた、より利用しやすい仕組みへ

(参考) 各学びの場における ICT の活用

一般学級



デジタル教科書やロイロノートの音声機能を活用し、誕生日のたずね方や誕生日を伝える表現に慣れるようにする様子



気持ちやイメージを描き足す表現を、タブレット端末で試しながら考える様子

通級指導教室

通級 & 在籍校での ICT活用～連携・協働～

【メモ機能の活用】

協働型巡回指導 ・音声入力に自信があり、積極的に取り組む

ブルーベリーは屋外の日当たりの良い所で育てるのが通っています。半日陰でも育ちますが花つきが悪くなりますなるべく日当たりの良いところに置くほうが元気に育ちます。

通級 & 在籍校での ICT活用～連携・協働～

在籍校

通級指導教室で書字が苦手な児童にタブレットの音声入力を指導します。
書字が苦手な児童生徒がスキッチというアプリでテストを撮影し、音声入力で解答する方法を通級担当教員が在籍校の担任に伝えました。これにより、書字に苦手意識のあった児童が自信をもってテストの答案を作成することができました。

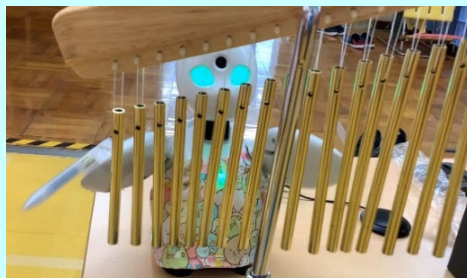
個別支援学級



(理科)
顕微鏡の接眼レンズにタブレット端末を取り付け、画像を撮影することで、子どもが観察カードに記録しやすくします。



(体育)
教員が実技の様子を動画撮影し、生徒たちは、自分の実技の様子を動画で確認し、振り返りに活用します。



特別支援学校

デジタル教科書を使用し、教科書のページも自分でめくれるようになりました。また、自宅からオンラインで参加している同級生と、意見交換もできるようになりました。
画面表示や操作方法等の端末設定を個々の児童生徒に合わせることに加え、視線入力装置などの入出力支援装置や、テレプレゼンスロボットを試行的に活用しています。

横浜市特別支援教育推進指針 令和6年3月
横浜市教育委員会事務局 特別支援教育課